

---

# Holy Brownie CHAPTER EXTRA 『悲しみの「空気」に微笑みを』

冴崎真琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H o l y B r o w n i e C H A P T E R E X T R A 『悲しみの「空氣」に微笑みを』

### 【Zコード】

N2149I

### 【あらすじ】

六道神土原作『Holy Browne』の一次創作。ある夜、現代の痛いお兄さんの元へ訪れたピオラとフィオ。今回の彼らの仕事は…あの有名なAVG『AIR』のSS執筆だった！

(前書き)

～お～とわら（必読）～

え～、この作品。

内容的に『か・な・り』精神的公害垂れ流しで、某法触発の危険性がある為、『15歳未満の方の』『ご講読を』で・き・る・こ・と・な・ら』『ご遠慮願いたいかなーと』『愚申します』。

せりに文面中、多面的に『不快極まりない』発言が多く存在していますが、願う事なら『ふとここでつかく』寛容に読み流して頂きたく思います。

上記内容を了承（1秒）した上で、続きを『ご講読下さい』。

朝露が消え

柔かな日差しの中田を開けると

そこには

全てが整い終りを告げていた

ブラウニー。

それは小さな職人

ブラウニー。

それは小さな

神の使者……

\*

夜も更け人々の寝静まる中、その2つの小さな光は、上から下へ天下る。

住宅並ぶその中の、ひとつにそれ等は音無く入り、そして小さく弾け、そこから愛らしい姿を現した。

内ひとつが辺りを見渡す。

内ひとつが命いの手を構える。

そして…先のひとつが口開く。

「庶民的な1DK！」

「いや〜、ファンタジーだね〜」

「見渡す限りのエントロピー！」

「生活感、お腹一杯だ〜」

「棚に並ぶはレアなアレーーー！」

「いつちゃって、既にファンシーか〜〜

「コレの何処が『メルヘン』なのよ！…」

ぐあしつと相方の胸ぐらを掴み、三角帽子をかぶった人形…ピオラは鬼の形相で言い放つ。それに対し二股帽子の頂点に、大きなポンポンをそれぞれ付けた長髪の人形…フィオは表情を変えず、その細い目を向けピオラに答えた。

「いやいや、所帯主の頭がそなんんで」

身も蓋も無い。

「救いようの無い厨房って訳ね…しかも……」

そう言いピオラは改めて周りを見渡す。

乱立するフィギュア。

家庭用、PC問わずの怪しげなソフト。

棚に並べられた、いかがわしき極みの粗画草書……。

「…で、今回の仕事は何？ 坂道、時計台、大樹までは『メルヘン』で許して上げる」

かぶりつきそうな勢いで、フィオの顔を引き寄せるピオラ。その

言葉に、フィオは何だと言いたげな顔を浮べ、

「察しが付いてるみたいだね。そう今回の仕事は……」

と、ここで言葉をいつたん区切り、四本しかない指の親指と小指を突き立てこう言った。

「H・ロ・ゲ」

ザツパ――――!

何処から取り出したのだろうか？ 手にしたカッターナイフについて、ピオラはフィオを一刀両断した。

袈裟斬りに胴体を泣き別れさせられたフィオは、慌てて下半身を掴み、紛失しないように抱え込む。

「日輪の輝きに――って、芸が増えてるよピオラ」

「……やれやれ、何なのよ今回の仕事は。神様ももつと仕事を選んで頂戴つての」

意味不明な事を言うフィオをよそに、ピオラはそう言い溜息を吐く。その後姿を見ながら、フィオは体をホツチキスで止め、あっけらかんとこう言った。

「いいじゃないの、地味だけど。レアな外庶民招き入れるより楽な仕事じゃない」

「……あんた、そんな仕事もしてたの……」

「いや～、その後そこの大陸、薬ヤクまみれになつた時には、さすがにコレで良かつたのかな～つと思つちゃつた」

某共和国、黒歴史。

「その口一度と開くなクズ人形つ――！」

一蹴。

再び惨殺死体さながらの姿になり転がるフィオ…それを尻田に、ピオラは相手に向つてこう叫んだ。

「とにかく！ ひとつと仕事の概要を話しなさい… チヤツチヤと終らすわよ――！」

「へ～い」

フィオは氣の抜けた声でそう答えると、今度は傍にあつたボンドで、その体を繋ぎ合わせた。

\*

「え～、今そこで爆睡しているオッサン。匿名希望な感じの人で、ハンドルネームが『鬼瓦満丸爆破』さん。どうやら某所に投下する為の『AIR』つてソフトのSSS書いている途中で寝ちゃったみたいだね～」

「わざとらしさ！」の上ない状況ね。…で、それを書き上げるのが今回のこと？」

「そうそう」

ピオラの言葉に縦に肯くフィオ。それを聞いたピオラは、胸を撫で下ろし安堵の息をもらした。

「…良かつた……内容の質はともかく、よつやくまともな作業工程が踏めるわ……」

「ホント地味だよね～。ファイルの中に『虫』でも入れよっか～！」

ギロツ

…ピオラの無言の圧力に、慌てて白旗代わりに首を振るフィオ。ピオラは表情を変え、すぐさま田の前に輝くPCのディスプレイを覗き込んだ。

「さて、何処まで書けて……」

「ふむふむ」

声を揃える2人。が、目の前の眞実に、2人は力無く床に転げ落ちた。

『「そろそろいい加減に寝てしまいなさいや～』

とお母さん。

「にはは」

私。『

……黙文とすらも呼べるのか？

「いや～… 文学って、ふとこり広いな～」

「……」

フィオの言葉に答える氣力も失うピオラ。フィオは更に言葉を続ける。

「久々のインパクトだよ… 10秒は死ねたね」

「日本語の美は何処行つたあ！！」

ピオラはおたげびを上げ、フィオにハ当代をきます。その際に使われたシャーペンが、見事フィオの脳天を貫いた。

「ここぞとばかりにボロくしないでよ。お氣に入りなのに」「やかましー！」

ビックと指差し、フィオにそう告げたピオラは、すぐさまマウスを器用に操り、先程の文章ファイルをゴミ箱に放り捨てた。

「あ～、やっぱりボツるんだ」

「当然！ リテイクどうこうの問題よ。『主』に反するけれど、こうなつたらプロットの隅々から再構築よ…！」

そう言つと、ピオラは再びフィオの方を振り向き、

「1、2世紀ぐらい後でいいわ。その辺から必要な物、取つて来て！」

と叫んだ。

それに対してもフィオは、全くやる氣無さそつに、腕を頭の後に組んでこう答える。

「また大掛かりな… 地味な仕事だし適当でいいじゃない」

「以前私が言つた事の復唱！」

「『本人以上に完璧な仕事するのがピオラ達』ね。あ～さぶイボが立つ」

## ざしゅ

再びカッターの一閃がフィオを襲う。それは両腕<sup>じのう</sup>と見事に額から上を跳ね飛ばした。

「ああ！ またしてもレトロな口ボのギミックがつ！」

「無駄<sup>バラ</sup>、ロスはもういい！… ゃつさと行かないと、ピクセル単位で分解すわよ！！」

「ピクセルは平面解像度だよ… って、わわっ。行つてきま～す！！」ピオラの怒気に恐れをなして、フィオはそう言い逃げるようになでいつた。その姿にピオラは溜息を吐くと、自分は自分で、成すべき作業をこなす事にした。

\*

「え～、コレで最後だよ」「こつちも大体終つたわ」

フィオが持つてきた材料を、なれたように操り組み上げていくピオラ。ただ乱雑にゴミが広がつていただけの部屋の中央に、重々しい器材が作り上げられていた。

「それにしても、たかだか小話ひとつのために、軍用多次元立体戦略シミュレーターを使うなんて、一体何処の誰の気の変わり様で？」  
「たかが腐れヒツキーのアニメス補完の為に、自分のシナップスを使いたくないだけよ」

「あ～、のつけから自棄なんだ<sup>ヤケ</sup>」

ピオラの言葉に納得するフィオ。ピオラは、そんな相方を無視して作業を進めた。

「マスクリング開始。基本、キャラクター設定入力。<sup>人物背景</sup>による各キャラの設定値補正。仮想領域展開後、各モデリングの設置、動作確認、後にデバックモードに移行…と」

大まかに作業を進めた後、ピオラは溜息を吐き目線を下へと落す。そして、そこに置かれていた設定資料を見て、げんなりとした口調で呟いた。

「…にしても、見れば見るほどヤになるわね  
「紙面がごわついてるのもまた一興かな」  
「そんな視嗅覚的な事じやなくつて。…設定よ、設定  
　　そう言い、足元に置かれている物のページをめくる。  
「少女の呼び方は女童めわらわじゃなくつて『女童』。女童と呼ぶのはもつ  
　　と後の時代よ。それに何コレ。儒教、道教、何処行つた！」  
「輪廻云々のアレね。いいんじゃないの？ ファンタジーなんだし」

ひた…

フイオの頬に、心無い刃があてられる。  
「何時から『独善』と同意語になつたのよ」  
「いや～～、日本語つて、地殻変動並に変わる物だし」  
「公国最後の栄光になりたい？」  
「…既に完成版なので結構です」  
冷汗を流すフイオ。ピオラはカッターをおさめ、そして器材の方に向き直した。  
「じゃ、デバック作業に入るわよ」  
「え～～！ めんどくさ～～」  
「無駄毛処理を怠つて、『完璧』な物が作れるか！」  
「ホントに大雑把かマメなのか……」  
彼等はそこで会話を切ると、自らの意識を情報化して、シミュレーションの中へと入つていった。

\*

シミュレーターの内部には、『AIR』の舞台となるあの町を模

して作られた空間が広がっていた。

2人はその箱庭の完成度を確認する。しばらくして、それらに不備が無いと判断したピオラは、早速シナリオ制作に入った。

「各思考ルーチンフル回転！ 無指向性イベント制作開始と同時にLAN回線解放！ Web上に点在する同作品関係の公開文献と照合し、算出結果と類似、照合した物を自動で制作リストから隔離！」  
「…ま、こんなモンね」

そう言い、汗を拭う仕草をするピオラ。フィオはそんなピオラに対し、こう問い合わせた。

「何でまた、そんな面倒な設定をするんだい？」

「ど～せやるなら、まだ誰も提示していない作品をアップした方がいいでしょ？ そこまでやつて完璧よ！」

得意げにそう言い胸をはる。そして更に言葉を続けた。

「『マンネリ』って言葉があるように、人の想像力ってのにも限界があるわ。それに引き換えこっちは200年進んだ超一人工偽脳（AI）！ いくらなんでも500万個以上の構想を算出すれば、未発表のネタが『まんと……』

「ピオラ…ピオラ」

優々と語るピオラの裾を、フィオはそう言い軽く引っ張る。相手が自分の方を向いたのを確認すると、フィオはゆっくじと空中に映し出されリストを指差した。

「鎮圧完了」

フィオの言葉と同時に、ピオラはその場に崩れ落ちる。リストの中央には、

『NO DATA』

と言づ文字が、『デカデカと赤く点滅していた。

「や～、さしものスーパーAIも、人の煩惱には勝てないか～」腕を組み、さも愉快そうにそう語るフィオ。

「さすがはオタク大国ニッポン！」

「悪評で日本を語るな！！」

ピオラは起き上がりざまにそつ脱び、フィオのアーチめがけて正拳を打ち込んだ。

…とは言え。

「参ったわ。時間もおしてゐつてのに」

「こゝは月並みに『総ナメ』で行くしか無いね～」

…『モズのはやにえ』と言うのは御存知でしょうか？

「『未使用』キャラだつて居るし、ちょうどどこのと思つんだけだな

…」

「だあつとれ、下衆人形！！」

傍の木の枝に縫いつけられてゐるフィオに対し、ピオラは強くがなりつけた。

「今真剣に打開策考てんのよ！ 大体そんな3流ネタは、最終手段よ、最終！！」

「却下と言わない辺り、大人だね～」

「黙れやソコ！」

そう言いピオラは再び思案にふける。それを見ていたフィオは、仕方ないとつた風に、相手に向つてこう声を掛けた。

「じゃあ、こんなのはどう？」

フィオは手元に必要な情報を引き出し、それを2、3書き換え始める。

「え～…神奈から観鈴に転生するタイミングを見計らつて…翼人の記憶を～」

圧縮。

「過負荷のでかい情報は、記憶野を始め多岐に渡つて障害を起こしちやうからね～。不要データは即圧縮！ 情報処理の基本だよね…あ、もしかして新発想？」

「売国奴！」

愚の極みとも言えるフィオの行いに、ピオラは怒りの斬撃を御見舞した。

「口クでもない事を！ 考える脳味噌何処やつた……」「えへ、斬新だと思うけどな～」

「希薄かつ唯一の柱へし折つて何言うか――――」

ありつたけの声を張り上げた後、ピオラはその場に力無く座り込んでしまう。

「ははは～…ピオラ初のお仕事失敗かも～～…」

「まあまあ。それより見てみなよ」

絶望に打ちひしがれている相方に、フィオはそう声を掛け、キヤラ達の方を見るよう促す。

そこには、いかなるしがらみにも囚われていない、愛らしい観鈴の姿があつた。

名も無いエキストラな親友と談笑を交し、家に帰れば母親が居て、しばらくすると下宿人らしい男が現れ…彼と共に買い物に向つ。謎の米袋を抱えた母娘と世間話を交し、幼馴染みらしい病院を経嘗する姉妹と出会つて……そして何よりも少女は、その笑顔を絶やすずにいた。

「生きてる間も、生まれ変わる時も、人はその記憶を小さくまとめて蓄える…。楽しい事も、悲しい事も。そして全てが終る時、人はその記憶を解き放つ」

フィオは静かにそう語つた。

「…確かにそうだったわね。それに意味があるのかは分からない…けど、肉体が『血』<sup>リンカネーション</sup>を繋ぐように、魂もそつやつて繫がつて行く。それが本来の『輪廻転生』だもんね」

ピオラも…フィオの言葉に同意する形でそう言つた。

「…が！ 今回はそんな10才級な御題じゃないのよーー。」「まあまあ…あ、そろそろ時間のようだね～」

ピオラの追求を逃れるように、フィオはそう言つシユミレーター

の外に逃げ出した。それを慌てて追いかけるピオラ。

外に出てみると、フィオが器材からデータを取りだし、それをP

Cに流し込んでいた。

「登場人物2名追加……つと、こんなモンかな?」

「……モンかなって……！　まさか今回の仕事のログを、そのままテキスト化したんじゃ……！」

「当り!」

悪びれも無くやう答えるフィオ。ピオラは口を半開きにして呆れ返った。

「や～、読み返すとなかなか面白いよ。客観視つて楽しいね」

「『ね』じゃない！！　楽な生き方すな――――！」

「いいじゃない。どうせ一次創作なんだし」

「そんな考えでいるから、『同人屋は責任能力無い』って言われんのよ――！」

「シユールだね～」

……などと会話を交しながら、彼等は再び光をまとい、天高く舞い上がった。

後に残る静けさ。

ひとつだけある窓から、朝の日差しがさし込んで来る。

いつのまにか無くなっている器材……そして今なお光々と輝く、P Cのディスプレイ……。

その画面上に書き上げられた文章。その最後にはこうしたためられていた。

そして彼等が去った後には

何かが終つている。

(後書き)

激しく古い作品です。

実は昔、某所に投稿した物なのですが、折角だからとこちらにも  
投稿させて頂きました。

キャラ崩壊、設定崩壊の好き放題ですすみません。

こんな拙い作品ですが、ちょっととした合間の息抜きとなれば幸い  
です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2149i/>

Holy Brownie CHAPTER EXTRA 『悲しみの「空気」に微笑みを』  
2010年10月10日07時08分発行